2021.9.30.
T.Kobayashi

辛うじて面目を保ってくれた新横綱
大相撲九月場所を終えて

九月場所開幕直前になって、「宮城野部屋でコロナ感染」の報道。その結果、取り決めに従って同部屋の全力士の休場が発表された。
先場所復活を遂げた白鵬は再び休場を余儀なくされて、新横綱照ノ富士のデビュー場所は「一人横綱」ということになった。故障続きでカド番の貴景勝と、あてにならない正代の二大関ではその穴埋めが困難なことは、始まる前にすでにわかっていた。そして・・・・

＜１＞ 照ノ富士優勝への道程

５日目・中日・１０日目～千秋楽の黒星数で見た成績分布の推移を下表にまとめてみた。
見てすぐにわかるように、５日目で全勝力士が２名、中日で１敗以下の力士が２名という低レベルな場所だったと言うことに尽きる。（青字＝大関　緑字＝関脇）

	無敗	１敗	２敗	３敗	４敗
５日目	照ノ富士 千代ノ国	正代、 御嶽海 霧馬山、 阿武咲 翔猿、 妙義龍	若隆景、 大栄翔 宝富士、 志摩ノ海、 隠岐の海、 遠藤、輝、 豊山、 千代丸	貴景勝、明生、逸ノ城、 隆の勝、北勝富士、琴ノ若、 玉鷲、宇良、照強、碧山、 英乃海、千代大龍、琴恵光、 剣翔、魁聖、千代ノ皇	高安、豊昇龍 栃ノ心、一山本 徳勝龍
中日	照ノ富士	妙義龍	御嶽海、 阿武咲 隠岐の海、 遠藤 千代ノ国	正代、霧馬山、大栄翔、翔猿、 剣翔、千代丸	貴景勝、隆の勝・ 北勝富士 若隆景、宝富士 宇良、碧山、 千代大龍、輝 豊山
１０日目		照ノ富士	阿武咲、 妙義龍	正代、御嶽海、霧馬山、 隠岐の海、遠藤、千代ノ国	貴景勝、大栄翔・ 宝富士、豊山 千代丸
１１日目		照ノ富士	妙義龍	正代、御嶽海、阿武咲、 隠岐の海、遠藤、千代ノ国	貴景勝、霧馬山
１２日目			照ノ富士	阿武咲、隠岐の海、妙義龍、 遠藤	正代、貴景勝 御嶽海 千代ノ国
１３日目			照ノ富士	阿武咲、妙義龍、遠藤	隠岐の海
１４日目			照ノ富士	妙義龍	阿武咲、 隠岐の海、遠藤
千秋楽			照ノ富士		妙義龍、遠藤

新横綱照ノ富士の相撲は、攻めがあり落ち着きがあって、自信に満ちている感じがした。これまでの場所では、何日毎かに必ず乱暴な相撲が見られたが、今場所はこれがなかった。敗れた相撲でも、強引な

取り口は見られなかったところに、安定性と技能が感じられた。
低く、しかも素早く踏み込み、左右のいずれかのまわしを引き、すぐに引きつけながら前進するという相撲が目立ち、前進が出来ない場合でも引きつけだけは欠かさないという「型」がはっきりしていた。
おまけに、大関・関脇陣で照ノ富士に刃向かうことができる力士がいなかったことが、場所をつまらないものにしてしまい、結果的に独走を許すことになった。
この相撲を切り崩すのには、立ち合いでまわしを取らせないことで、鋭い突き押しと素早い動作が出来ること、または横に食らいついて頭を付けて低い姿勢を保つことが出来ることしかないと感じた。
まさしくその通りになり、新横綱に黒星を付けたのは大栄翔と明生だった。
しかしながら前述の様に、星一つの差で後に続くのは平幕力士だけで、最後まで残ったのは妙義龍だけになってしまった。

＜2＞ 三賞の行方

「誰が優勝争いを面白くしたか」という視点で振り返って見ると、横綱の全勝・独走を止めた大栄翔の他に最後まで残った妙義龍の他に阿武咲、遠藤を挙げることができる。
逆に「誰が優勝争いをつまらなくしたか」という視点で見ると、正代と御嶽海ということになるのかもしれない。
「優勝力士に黒星を付けた」という評価点で殊勲賞が大栄翔の手に渡ったが、その後の展開を面白くしてくれたという点を含めて見ると、妙義龍の方が妥当だったのではないかと思う。

次に「技能・技巧に優れた力士は誰だったか」という視点で振り返ると、今場所の質の高さがわかる。
四つ相撲の分野では霧馬山、妙義龍、遠藤、突き押し相撲では阿武咲、大栄翔の名が出てくる。
妙義龍は、前さばきの巧さ、速攻、低く安定した姿勢、叩きに強い力士、前褌取りの速さ、突き押しも出来る四つ相撲などの評価で、関脇の座を続けたこともあるベテラン。過去を知る人から見れば、正代を一直線に運ぶことなど「当たり前」なぐらいの技能派力士だ。
遠藤も妙義龍同様に、低い立ち合いから素早くまわしを取り、機敏に動きながら相手の弱点を突いていく「教科書通りの相撲」をいつも見せてくれる。今場所もその腕前が光っていたが、突進型の力士に弱いという欠点がある。勝った相撲だけを見ると、照ノ富士と同じように淡々と自分の相撲を貫く姿勢が感じられた。
数場所前から頭角を現し始めた霧馬山の相撲技術も光っていた。速攻で前褌を取る相撲、次から次へと技を繰り出して相手を翻弄する相撲、頭を付けて長い相撲を粘り勝つ相撲、土俵際最後まで何が起きるかわからない多彩・機敏な身のこなし方が素晴らしかった。元横綱鶴竜や元大関霧島の教えを受けて育った相撲はまだまだ伸び代がありそうに感じた。
技能賞は妙義龍になったが、将来性を加味して（若手育成の観点からも）霧馬山でもよかったのではないかとも思うし、遠藤も捨てがたいなという迷いを感じる場所だった。
正統派・技能派の力士が活躍すると相撲が活性化し、大きく発展するとも言われている。

「敢闘精神あふれる好成績力士は誰だったか」という観点で見ても、ここまでで出てきた名前が印象に残る。大栄翔に殊勲賞、妙義龍に技能賞とした相撲記者クラブの面々は「敢闘賞は該当者なし」としたが、やや疑問が残った。
いつものように私が選ぶ三賞は、

殊勲賞＝妙義龍　　技能賞＝霧馬山　　敢闘賞＝阿武咲・遠藤

＜3＞ 次の時代を読み取れ

新横綱登場で浮かれる中で、大関の不振が続いている。

首の故障を抱えている貴景勝が今後復活するとしても、極めて安定性の低い状態にあることは間違いのないところである。仮に四つ相撲に転向するとしても、時間もかかるだろうし、首にダメージを与えない範囲での相撲の「型」には限界があるだろう。
正代は、胸と顎を出して定位置で立つだけの相撲では攻撃対象にこそなれ、自ら攻撃して相撲を取る形にはほど遠い。相撲を大きく変えない限り、今のような不安定さは解消しないだろう。
つまり現在の大関は「陥落の可能性」をかなりの確率で秘めていると言える。
これまで「一人横綱」とか「横綱不在」とか言われることが多かったが、間もなく来る「大関不在」の場所を想定しておかなければならないだろう。
現時点では次の大関を目指す安定した関脇はいない。相撲協会はどうするつもりなのだろうか？

＜4＞ 白鵬引退・覚悟すべきことは

場所が終了して一息ついたところで「白鵬引退を決意」の報道が流れた。新聞の報道を見ると
「菅政権を振り返る」特集記事の数ページ後に「白鵬の活躍を振り返る」特集記事が組まれていた。
新横綱には大変失礼な発言になるかも知れないが、照ノ富士は両膝に爆弾をかかえており、これがいつ爆発するかもわからない。本人も言うように「そう長い間務められるかはわからない」という状況。
前項で「大関不在の可能性」に触れたが、「横綱・大関不在」という事態もないとは言えない状態。
既に何年も前から指摘する人は少なくないようだが、相撲界は今危機に直面していると見ている。

以上